
神様がプロデュース！？

yasu

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

神様がプロデュース！？

【Nコード】

N6918S

【作者名】

y a s u

【あらすじ】

なんでもなさすぎるただの少年、佐々木和人。彼は「ヒーロー」になりたいと夢見ていた。しかし、そんな夢をみているばかりに、暇をもてあましている神様に目をつけられ、世界が中途半端に変わってしまった！ひょんなことから、始まるドタバタ学園ストーリー、スタートです。

これがあの日の始まりで

第1章

これがあの日の始まりで

「主人公^{ヒーロー}になりたい」

穏やかな日の午後、太陽は朗らかな陽気をさしてはいるが、まだ3月3日の空気はどこか冷たさをひそませているようだ。そんなんでもない日の午後に、俺はそんな言葉を呟いていた。

「へー、最近の夢遊病者って歩きながら、しかも喋れる機能までついているのね 驚きだわ」

「寝言じゃないから！！ていうか、夢遊病者はロボットじゃないから！」

いつものように、俺の呟きは幼馴染の清水秋葉によって茶化されてしまう。

「人より目立ちたいなんて考えてもロクなことないわよ。特にあんたには」

「・・・うるさいな、わかってるよ。でも、こっちはそうなりたいて思ってたんだよ」

俺こと佐々木和人の15年間の人生はいたって平凡であった。

勉強もスポーツもなにもかも。容姿も中の中ぐらいだ。ツンツンした髪だとかチャームिंगな瞳を持っているだとかいう特徴も特に無い。身長、体重、座高も全て全国平均をキープし続けている。何においても人に褒められることもなければ、励まされるほど酷くもない。そう、全てにおいて普通なのだ。人に誇れる才能も無ければ、人から頼りにされる能力もないのである。

悲しきかな、俺の人生。

俺の人生は今も豆電球のように細々とひっそりと輝きつづけている。確かに「平凡万歳」とか「普通が一番」とか、昨今の風潮がものがたっている節もある。だが！一度ぐらいは、太陽のように恒久的でなくていいから一瞬でも強く強く輝きたい！
はい、回想終了。

「つてわけだよ」

長い長い己のつまらない人生の回想を振り返るほど辛いものはない。今まで何回もこうして振り返ってみたものの一度も新発見なんて無かった。傷を深めるばかりである。

一方、秋葉はというと…

「・・・、ふん、へへ、ほ」

「まさかの投げやり！」

真面目に話してるのに相手に流されるほど、精神的につらいものつてないよね。

「・・・。え、ごめん、なんか言った？」

しかも無視だった・・・。

「とにかく！一瞬でもいいから、ヒーロー的なものになってみたいんだよ！」

「別にあんたがそれでいたいならそれでいいんじゃない。あたし好きよ。そういう『俺は火。になるんだつてばよ！』、とか『海。王に俺はなる！』とか」

「それ、少年漫画だろ！リアルでそんなこといつてるやついたら痛い子だから！」

「はいはい。十分、今も痛いわよ。まあ、次は高校生なんだから真面目な夢みなさい。じゃね！」

「ああ、じゃあね。……つて、痛い余計だ！」

そう、今日は中学校の卒業式だった。高校になって別れる友達もいて悲しかったが、俺と仲のよかった秋葉とかほとんどの人はだいたい同じ近所の高校に通うらしい。まあ、特にさしたる思い出も無かったから、卒業式の日だったのに普通に学校に通う感じだった。俺、どこかサバサバしてるのかもしれないな。

「まあ、明日から春休みで遊びまくるから、今日はさっさと寝るか！」

このとき俺は、完全に自分の夢を隅においていた。だれも相手にしてくれないと思っていたからだ。

しかし、このとき俺の想像だにしない場所で、俺の夢を相手にしてくれている奴がいた。

まさかあんな奴が本気にするとは……。

天上界

「あゝ！暇だ！だれか遊べる奴はいねえのか？」

穏やかな日の午後、太陽は朗らかな陽気をさしてはいるが、まだ3月3日の下界の空気はどこか冷たさをひそませていた。だがそんなことは関係ない天空界では、『一人』の神様が「誰か構ってくれないと死んじやうよ」的な雰囲気を出しながら、大いに暇をもてあましていた。

「おいその。俺様と遊べ」

そんな迷惑極まりない質問は「忙しくて死にそう」的な雰囲気を出している、一人の天使に突き刺さった。不運にも白羽の矢が立つてしまった天使はというと

「わ、わ、私には恐れ多くて、と、とてもとても」

酔っ払い上司に絡まれた新入社員のごとく完全に困っていた。

「ふん、まあいい。はなから期待しとらんわ。忙しいのであろう？
行つてよいぞ」

「あ、ありがとうございます」

そう言つて、天使は逃げるためなのか、忙しいのか神様には分かれぬ様子で去つてしまった。しかし、神様はそんなことにはもはや気を留めていなかった。

そもそも、仕事が面倒だからつて理由で天使たちに全ての仕事を押し付けたのだ。しかし、ここは天空界。憎悪や悪意は一切存在しない。天使たちは不平不満なんて考えもせずに、黙々と仕事をこなしている。

「あゝ、暇だ。誰も構つてくれないし、仕事とかいまさらだしよ。天上界がダメなら地獄にでも遊びに行くかあ？でも、あそこ暑いしムサイ男ばつかだしなあ。・・・あ、ダメだ。俺、閻魔の野郎に今月貸しあつたわ。しゃあねえ、下界でも覗くか」
そういつて神様はしばらく下界を覗いていた。

「……あ、俺の作ったナスカの地上絵、まだ残つてやがる。絵に凝つてた時期あつたからなあ。スフィックスも案外うまく出来たし。ま、こんなところで俺の過去の輝かしいアート見物はおいといて、こんどは遊び相手でも探すか」

結局、暇がつぶれれば何でもいいのである。

下界の遊び道具を探し始めて三十分後、幸か不幸かその気まぐれの矢は、一人の未来の男子高校生につきささった。

「しっかりいるじゃねえか、たいそう面白そうな夢見てる馬鹿が。いいだろう！その夢、俺様が叶えてやる！」

こうして、その未来の男子高校生こと佐々木和人の全く想像にも

つかない新しい人生が始まることになる。

神様との出会い

第2章

神様との出会い

「かずと」。いい加減起きないと、入学式から遅刻するぞ」

どこからかそんな言葉が頭の中に響いてくる。ああ、もう朝か。俺の体は思った以上に正直者らしい。脳が起きろ起きろと命令を出しているが、体は全く動かない。俺の身体の中では起きる起きないをめぐって大論争をくりひろげているのだらう。

俺の意識はもちろん、もうちよつと寝るよ党に清き一票投じている。このままいけば、俺の一票は無駄にならずにすむだらう。さあ、二度寝の開始だ」。

「いい加減起きろ！遅刻したってしらないぞ！」

また声が響いてくる。相手もいらいらしてきているのか、口調がやや雑だ。しょうがない、朝から父さんとケンカだけは避けたい。

俺のモットーは安全第一だ。

「わかったよ。今起きる」

ようやく意識がだんだんとはっきりしてきた。

今日は4月1日、俺の通う日比野高校の入学式の日だ。

部屋には4月特有の、肌に心地よいつめたさのなかにどこかに温かみを感じさせる空気が漂っていて、目を閉じていても春の朝日が部屋に射ってきているのがわかる。外からは鳥のさえずりが聴こえてきて、手にはフカフカなクッションの手触りと、ゴツゴツした何かの手触りが伝わってくる。……ん？ゴツゴツ？

何かのゴツゴツした不審な感触が俺の意識をじわじわと覚醒へと導いていく。そういえば、もう一つおかしいことがあった気がする。…何だ？何がおかしい？いくつものクエスチョンマークが頭に浮か

び上がるが、覚醒しきっていない頭では答えは浮かんでこない。ヒントを、ヒントを探すんだ、和人よ。今日は何の日だ？中学校卒業式？違う！春休み？違う！4月1日？もっと詳しく！……入学式？……そうだ！今日は高校の入学式だ！

その瞬間、俺の頭は完全に覚醒し違和感への正体へとたどりついた！

「父さん、昨日から福岡に単身赴任中だ！」

そう、父さんは高校生になった俺に家を託し、福岡へと単身赴任中だった。したがって、この家に俺以外に男はいない！

「その声は誰だ！」

俺は上体を跳ね上げ、部屋の入り口を見つめた。俺の視線がすぐさま一人の男を捕らえる。

その男は上半身が裸の半裸の状態だった。だが、背はモデルのように高く、若干華奢な体ではあるが、むき出しの上半身はアスリートのように鍛え上げられている。また、春の日差しを少しも吸収することのない、男の頭を完全に覆っている白髪が一瞬老けているような印象を与えるが、どう見ても20代のピチピチの肌である。おまけに目鼻立ちが整っていて、十人が十人認めるであろうイケメンときている。畜生め……。

「お、お、お前は誰だ？で、出て行かないと、ふ、不法侵入で警察呼ぶぞ！」

当たり前ではあるが起きて目の前に半裸の正体不明の男が立っているのは、人生で初体験である。脅しもどこかビビリ腰だ。人生でケンカなどしたことはないが、すぐさま相手にケンカができるよう少年漫画を読んで習ったように体を構え、そして出来うる限りの威嚇を瞳にこめ、強く相手を睨み付けた。

だが、相手は全く動じる様子を見せない。正体不明の半裸男は、言葉を発しようとゆっくりと、ゆっくりと口を開いていく。

体に自然に力が入り、金縛りにあったように動かなくなる。緊張の汗がするすると頬をつたい、手にも汗がにじんでいるように感じ

た。

停止していたように感じられた時間は、ゆっくりとだが確実に動き出した！

「俺様のことか？わからんなら、教えてやろう！俺様は貴様をヒーローにするために、天上界からやってきた全知全能なる神様だ！」

……一瞬で空気が消しとんだのを感じた。

あつけにとられた俺の思考は停止を通り越して、核ミサイルを打ち込まれたかのごとく消し飛んでいた。どうしよう頭が動かない。

「……ヒーロー？何のこと？てか、神様って」

「何のことって、貴様がこの前に喋っていたじゃねえか」

「なんであんたが俺の願いを知っている？そもそも、ヒーローってどうやって」

確か3月3日にそんなことをつぶやいた記憶はある。そもそも前から望んでいたのだ、だけど人前で話したのは、まだ秋葉の前だけだ。他に人はいなかったはず。

「なんでって上で聞いていたに決まっているだろう。ちゃんと貴様をヒーローにしてやる段取りもつけてやってきたんだぞ」

「段取りって、どうやって？」

そのとき俺は「貴様をヒーローにする」という言葉に完全に惹きこまれていた。

「一から教えていたのではつまらないであろう。下界の言葉で言うならば、百聞は一見にしかずだ。貴様のベッドの上を見てみるがいい」

言われたとおりベッドの上に目を向けた。見た瞬間、俺の中に衝撃が走った。そこには、目を疑を疑わずにはいられないものが置いてあった！

「なんだこれ！た、た、大剣！？」

そこには一本の身の丈程の大剣があった。それは、特に目立つものを置いていない部屋で場違い感甚だしい異様な存在感を放っていた。逆に、今まで気づかなかったのが不思議でしようがない。どうやら、朝感じたごつごつした感触の正体はこれだったらしい。現実の騎士が使っているようなものではなく、それこそRPGで勇者が担いでいるような、あまりにも馬鹿デカイ刀だった。曲線をいうものを知らぬかのようにどこまでも真っ直ぐで、装飾などは一切無く、無骨さがきわだっている。

ていうか、こんな形の大剣、使われている絵画なんて歴史の教科書でも見たこと無いぞ。こんな、縦長の鉄の塊に太めの柄がついてるだけじゃないか。そもそも、どんなマツチヨなお兄さんでも戦えなさそうだし、ましてや俺なんか持ち上げることさえ無理そうだ。

でも、俺は気づかぬうちにその剣に惹きつけられていた。何故だかわからないが、この剣が僕に任せると力強く話しかけてきているように感じられ、五感が全て麻痺したようにその剣一本を捉えている。

本当にこの剣なら、俺を……。

「……でも、こんな誰も振れないよ。で、この剣が俺をヒーローにするだって？」

「案ずるより産むが易しだ。一回持つてみる。持てばわかる」

「言われるままに剣を持ち上げてみた。すると、

「あれっ、重くない？なんで!？」

なんと身の丈程ある鉄のバットは金属バット程度の重さしかなかった。

「そう、軽いであろう。それは貴様がその剣にふれたときだけ軽くなるのだ。ために床に置いてみるといい」

「置くとどうなの？」

「ほれほれ、ものは試しだ」

今度は言われるままに床に剣を置いてみた。

するとその瞬間、床がメキメキと音をたててめり込んだ！！目に見える速さで床が沈んでいく！

「ええ〜〜！ちよつと、待って！」

急いで剣を持ちあげた！また、剣は軽くなり床への侵食がストツプする。

間一髪でセーフだったらしい。床には亀裂が入り、今にも穴が開きそうだ。俺の部屋は2階だったから、もう少し見ていたら家が大惨事になっていただろう。

そう思うと、冷や汗が出てきた。

「な！」

「な！じゃねえだろ！言われるままにやったら、今、我が家崩壊の危機に直面したわ！」

今更ながら、こいつが神様かわらなくなってきたぞ。

俺の第六感が危険信号を出しているのを感じた気がした。

しかし、これが俺と神様（本物）の出会いであった。

想像つかずの高校生活開始！？

第3章

想像つかずの高校生活

開始！？

高校生活一日目の朝、全国の新高校生らが期待に胸膨らませ高校に通っているであろうその時、俺は全国一番であろうハッスルを朝から発揮していた。

「うおおおおおおお！！！」

俺は一心不乱に身の丈ほどの大剣を、魔物との世紀末戦争真っ只中のように振るっていた。

「クカァ！」「ゴアァ！」

右、左とあらゆる方向から襲いかかるモンスターの攻撃をギリギリのタイミングでよけるが、完璧に回避しきれずHPをわずかにもっていかれる。だが、こっちはお返しにと言わんばかりに一撃決殺の大剣で真っ二つに切り払い、モンスター達を次々と屠っていく。俺は誰の為でもない、己のための血路を切り開いてゆく。その度に犠牲となったモンスター達の血が辺りに飛び散り、人生で耳にしたことのない、魔物達の断末魔の声が清々しい朝のご町内に響きわたる。

視界の隅にはそんな勇ましい俺を、優しく見守る顔なじみのご近所さんたちの姿が映る。

「よう、和人！朝から張り切ってるな！頑張れよ！」

「そうじゃ！和人よ。己を信じて突き進むのじゃ！」

そう、俺は一人じゃない！みんなが、俺に惜しげも無い声援を贈

つてくれる。そのたびに元気なご近所さんパワーをもらい、感謝で涙があふれそうになる。しかし、今の俺には声援に言葉を返す余裕も、泣いてる暇も無い。

そもそも、どうしてこんなことになったかというところ……

30分前……

俺は自分の部屋の床が破損したことで（第2章参照）、神様（自称）との言い争いをしていた。もちろん騒動の発端となった剣は右手に持っている。

すると、部屋に一つのベルが鳴り響いた。

「あ、もう学校に行く時間だ！着替えなさいと！」

用心深い俺は、学校にきちんと間に合うように1時間早く目覚ましをかけていたことを思い出した。

ちなみに俺の通う、日比野高校は家から徒歩10分と極めて近い。志望理由が近かったからと聞かれれば、否定は出来ない。だが、日比野高校はある程度の進学率はキープしているらしい。

例の大剣を神様（自称）に投げると、簡単にキャッチしてみた。神様（自称）も床にへこむ様子はない。よし！

すぐさま目覚ましをとめ、急いで学校の制服に着替え始めた。とりあえず、神様（自称）は悪意がなさそうなので、とりあえず放置。これでも人を見る目はいいと9年間先生から褒められている。確証は無いが。

「おい、俺様を無視して着替えるとは何事だ」

向こうはご立腹のようである。しょうがない、変な行為に及ばれなくても困るしな

「ていうか、さっき神様とか何とか言ってたけど、どこまでほんとか？」

「今更だな、おい。まあいい、俺様が神様だということは100%

本当だ。テレ。オンシヨツ。ングで『俺様が神様だと思わない人』でスイッチオンして、タ。さんストラップがもらえるほどホントなんだぞ」

「1199パーセントじゃん！」

ひどく曖昧な神様だった。

「ともかく俺様は神様だ。どうせ後で貴様は信じざるをえなくなるだろうから、今はまあ信じなくてもよい」

「なんか不吉なものいいだな。で、そんな神様が俺にこんな大剣、プレゼントしてどうヒーローにするつもりだい。ここは現代の街中だよ。近所の野良犬でも狩られていくのかい」

ネクタイを締めて、よし着替え完了つと

「安心しろ、その辺で俺様に抜かりは無い　とにかく、貴様はその大剣を持つてくがよい」

「はあ！？こんな剣もって街中歩いたら、銃刀法違反で捕まるよ！」
学校初日に捕まるなんて阿呆らしすぎる。とうとうこいつが信じられなくなってきたぞ。

「とにかく！絶対にこんな大剣、学校に持っていかないからな！」
そう言い捨てて、荷物を持って部屋を抜けだし、1階へ駆け下りた。

「ふん、なかなか威勢がいいじゃないか。どうせ今のうちだけだろうな、あいつが『自分』の現実を信じていられるのは……。おっと、俺様も朝飯はまだだったな」

そう言い残して、神様も大剣を手に取り、1階へと降りていった。

一方、和人はというと……。

「カズおめでと〜〜！」

「おめでと、アニキ！」

パ〜ンというクラッカーの音とともに、母と妹から祝福を受けていた。

「うわ！ちよつと、なんで、ハイテンションに祝福してんの？てか、朝からクラッカーって近所迷惑だよ！」

「もう、カズってばテレちゃって。言わなくても分かるでしょ？」

母さんと妹の優美子の祝福を適当にあしらいつつ、俺は席について朝飯のパンに手をつける。

まずは朝飯を食べないとな。パンにバターを塗って、今日は苺ジャムにしようかな？

「はいはい。ってか母さんも親戚のおじさん、いきなり上げてんのやめてくれよ。知らない人だから、いきなりはさすがに困るって」

「親戚のおじさん？誰のこと？」

「は？誰って？」

そついいかけたとき、隣から声がした。

「貴様はまだ俺様のことを信用していないのか。いやはや失礼の極みだな」

「うお！いつの間に！」

気づいたら隣の席について、悠長にパンをかじっていた。　ってか、そこ父さんの席だから。

「あら、神様。いらしていたのね」

「いやいや、母さんなに信じちゃってんの？」

「神様おじさん、バターとって」

「あいよっ」

気づけば、母さんと優美子が籠絡されていた。

「……いやいやいやいや、神様って」

「もう、カズったら神様に失礼でしょ！どうもすいません、うちの息子が失礼な口をきいて」

「そつだよ、アニキ」

「そつだぞ、口を慎め、若造が」

「え！？俺がおかしい雰囲気？」

……しようがないな

「優美子。アニキの頬をつねってくれ、夢から覚めたい」

そう、これは夢、これは夢、これは夢！目を覚まさねば！

「えい！」

頬をつねるところか、優美子はテーブルの上の左手に垂直にフォークを突き刺すサービスをしてくれた。

「痛~~~~~~~~！！ええ！ちよつと何してんの！？」

「しし座12位なんだ」。残念」

実の妹にもガン無視をくらった。こっちの方が被害が大きかった
だが、目は覚めた！隣に怪しい男などいないはず！！

そう思い、意を決して左隣を見た

「おはよう。いい加減目は覚めたか？和人くん？」

やはり、半裸の自称神様はいた。

「信じるしかないのか……」

俺は人生で初めて、膝から崩れ落ちた。

朝飯を食べ終え、顔を洗い歯を磨いて、準備万端だ。高校入学で
新調した靴をはく。優美子はもう行ったようだ。もちろん隣には、
神様（本物）がいる。

「ようやく貴様には信じてもらえたのは、よろこばしいことだが、
あの大剣を持って行かないのはいただけないなあ」

「いいだろ、捕まることより。それより、信じてあげるから、僕の
要求もきいてくれよ」

そう言いながら靴紐を結び終え、つま先をリズムよく地面に叩き、
ドアノブに手を伸ばす。

「なんだ？」

俺は振り返って、要求を待つ神様を見る。

「俺にだって、『佐々木和人』って名前がある。だから、呼ぶときは
貴様じゃなくて名前でごんてくれ」

「そんぐらいならいいだろう、和人。だがな、和人よ」

「ありがと。じゃ、母さん、いつてきまゝす」

台所で朝食の洗い物をしている母に声をかけ、俺はドアノブをひねり、ドアを開けた。わずかに開けただけでも、外から日差しが差し込んでくる。

ようやく騒がしい朝を抜け、高校生活に入れると思うと期待に胸が踊ってきたので、俺は一気にドアをあけ、目の前の光景を見た。

「あの剣を持っていないと学校にはたどり着けないぞ」

「……………」

家の前の道路に、数え切れないほどのおどろおどろしいモンスター達が優等生よろしく、きちんと2列に整列して、こちらを凝視していた。中央の、カタツムリが立つとこんな感じになるんだろうな的なモンスターが一匹進み出てきた。

「……………あ、和人様。お待ちしておりました。私たち、きy」

「断じて人違いです!!」

急いでドアを閉め、鍵をかける。しっかりチェーンも忘れない。しまった、陰陽師のDVDぐらい見とくべきだった。くそっ!

なぜだろっ冷や汗が止まらないし、運動をしたわけでもないのに息切れがする。いや理由はわかつているが。

「おい、早く行けよ。まだ40分ぐらい余裕はあるが、急がないと遅刻するぞ」

「あれ、なんだよ!? あんなもん、本場のハロウィンでもみかけないぞ!」

「なにつて、モンスターに決まっているだろう。他に何に見えるんだ?」

「あれが見えること自体が大問題だろ!」

見間違いだと願いながら、ドアについてる覗き穴から覗いてみる。やはりいる。こちらを見ている。覗き穴を覗いているのに、むこう

とちゃんと目があつてるんだけど。ていうか、めっちゃ礼儀正しいのが更に怖いよ。道を通りたがってるおばあちゃんにきちんと道を譲ってるし。てか、なんでおばあちゃんお礼してんの？つつこむところでしょ。

「おい、早くしろと言ってるんだぞ」

「あれも神様の仕業か」

「ああそうだ。あれは俺様の魔界用の召使いだ。HPが0になると魔界で蘇生されるよう、調整してあるがな」

「なんであんなもん用意してくれちゃってんだよ」

俺は苦い顔をしてきいたが、神様の方は満面の笑みを浮かべていた。

「よくぞ聞いてくれた、和人よ！」

「もったいぶんなよ」

「ふん、まあここまで長くかかったしな。短いところは省いてやろう」

「早くしろ」

神様は人差し指を突きつけ、俺に告げた。

「お前は今日から『勇者』になったのだ！」

あの大剣であいつらを倒して勇者になれというのか。ああ、そういうことか。もうどうでもいいや。どうやって学校行こうかな。それより入学式間に合うかな・・・。

もはや呆けている俺を尻目に、神様は言っただけで、まだ和人の望む『主人公』になっただけで、まだ和人の望む『主人公』になっただけではない。まあ、和人一人で戦えるようにしてや...

「はあ！？あれを俺一人で倒せていうのか？俺、ありんこ一匹殺したことがない現代っ子だぞ。戦国の武者じゃあるまいし」

「ありんこ一匹って、雑魚すぎるだろ。プッ」

「比喻表現だよ！」

まずいことになったぞ。ホントに勇者の真似事みたいじゃないか。どうしよう、どうすれば学校に辿りつけるんだよ。そもそも……考えすぎて頭が痛くなってきた。混乱しすぎて頭がもう……。

「落ち着け！和人！」

「落ち着けるか！そもそも俺は神様に、ヒーローにしてくれって頼んだ覚えは無いぞ！」

「でも、お前は本気で願っているんだろうが！」

その言葉が俺の胸を突き刺した。普通から抜け出したいと願ったのが、今では普通に帰りたいたいと願っていた。そんなわがままな自分にふがいなさを感じた。どこからか反発したくなる気持ちが湧いてくる。

「ああ！そうだよ！でも神様なんかにわかるもんか！」

完全に八つ当たりだった。でも出てしまった言葉は戻せない。俺は目を逸らした。

だが、神様はそんなクズみたいな俺をまっすぐに見てくる。

「だったら、夢をつかみとれるチャンス逃すんじゃないぞ！」

今度はその言葉に頭を打たれた。

……そうだ、どんなに願っても普通から抜け出せなくてもがいていた俺が、一瞬でも人より輝く人生を望んだんじゃないか。今の俺には、そのチャンスがある。

自分でそいつを投げ出して、夢をみているだけで俺の人生は終わるのか。結局、俺の願いはそんなちゃっちゃいもんだったのか。やっぱり俺にはそこらへんに転がっている脇役にしかすぎなくて、そんな自分に心のどつかでは満足していたのか。

そう思つと、自然に口から言葉が出てきた。

「……るよ。」

「聞こえねえぞ」

俺はまっすぐ神様を見つめ、神様と目があつた。神様の顔には意地悪そうな笑顔が浮かんでる。もはや俺は体の底の方から湧き上がる咆哮を抑えきれずにいた。

「やってやるよ！だから、神様！俺に力をかしてくれ！！」

どんなことでもいい！やれるもんは片っ端からやってやる！

今までに感じたことの無いような感情が爆発し、荒れ狂う感情の波が俺を突き動かしてくるのが分かる。

「よっしゃ！その意気だ！」

そういつて神様は、無骨な大剣を何も無いところ取り出した。無骨で装飾も無いその剣が、今の俺には輝いてみえた。

あの剣なら俺を『主人公^{ヒーロー}』にしてくれる！今の俺に伝えてくれる！そう思うと、俺は剣を神様から奪うように掴み、家を飛び出した！

「あ、和人様。」

もう一度、さっきのカタツムリが出てきた。

「邪魔だあ！」

そう叫んだときには、俺は大剣を迷わず頭のとっぺんに突き刺していた。

「ギョエエエエ~~~~！！」

断末魔の悲鳴と共に、中から水のような透明な液体が勢いよく出てくる。HPが0になったのか、神様の言っていた通りに姿は消えてなくなった。

俺は地面に着地して、あたりを見回した。俺を囲むモンスター達も神様も、いつの間にか台所から出てきていた母さんも、みんな俺を見て微笑んでやがる。どうやらみんなグルになって、この展開を作りがついていたらしい。そう気づいた俺も、気づいたら微笑みが隠せなくなっていた。

今日から俺は変わるんだ。そこらへんに転がっているような脇役から抜け出して、主人公^{ヒーロー}になってやるんだ。

そう思うと、俺は相棒の大剣を担ぎ上げ高らかに宣言した。

「今日から勇者になった佐々木和人だ！以後よろしく！」

その瞬間が最高に気持ちよかった。巢から飛び立つひな鳥もこんな感じなのだろう。そう、今日から俺も飛び立つんだ！

俺の勇者宣言を聞いたモンスターたちは、鬼ごっこが始まったかのように俺の高校の通学路の方へ逃げ出していく。それを追おうとしたとき、後ろから声がした。

「おうおう、様になってるじゃねえか。」

「ありがとう、神様。俺やっと変わるよ。夢にまで見た主人公ヒーローに」その言葉を聞いた神様は、満足だと言わんばかりに笑っている。

「勘違いするんじゃないぞ。俺様の計画の中では、お前はようやくスタートラインにたどり着いただけだ。俺様と和人の望む主人公ヒーローへの道にはまだまだ動きだしてすらいねえ」

「んなもん上等だ」

「だが、ようやく俺様も楽しくなってきたぞ。そうだ、いくつか言っておくことがある。一回しか言わねえからよく聞いておけ。まずはその剣のことだが」

そう言われて剣を見た。

「その剣はなんでも斬ることができるし、なんにも斬らないこともできる」

「それ矛盾してるじゃん。禅問答？」

「まあ、その辺は使えばわかる。自分で調べな。ヒントを言うならば『本質』とだけでも伝えておこうか」

「本質ねえ……」

どうやら隠された能力でもあるようだ。でも、今は悠長にしている暇はない。

「二つ目はHPのことだ。この世界ではHPが全てのものに与えられている」

「全てって俺も入るのか？」

「ああ、もちろん。HPが0になると、あらかじめ定めた位置に転送される。今はこの場所だな」

「ん、了解」

0になると、家に戻っちゃうのは不本意だけど、今更だししょうがない。

「あと、最後にプレゼントをくれてやる」

そう言つと、俺の背中に大きな肩掛け式の大剣ホルダーが出てきた。

「さ、これで準備は整ったし、始業の時間まで30分ある。存分に暴れてこいや!」

「おう! ホントに最高のプレゼントありがとな、神様! じゃ、行ってくる」

俺は新たな学校へと駆け出していった。

和人が学校へと走りだしたとき、神様の方はというと

「あらあら、あの子やつと生き生きした青春をおくれそうだね。これも神様のおかげね」

勢いよく走り出して遠ざかっていく和人の後ろ姿を誇らしく見つめながら、和人の母、佐々木八千代はそんなことを呟いていた。

「安心するにはまだ早いぞ。あいつにはこれから大変な困難が待ち受けているからな」

「でも神様がサポートしていただけるんですよ」

「まあな。なにせ俺様が作ったシナリオだ。原作者は最後まで自分の作った物語を見届ける義務がある。最初から最後までしっかりとプロデュースしてやんよ。まあ、物語を切り開いていけるのは佐々木和人、あいつ次第だな。おっと俺様も時間が迫ってきてるから、特急で行くでしょう」

そういつて神様は、八千代の隣で忽然と姿を消した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6918s/>

神様がプロデュース！？

2011年4月24日14時10分発行